



東北大学片平キャンパス

会 報

第 18 号

35周年記念

東北大学教育学部
同窓会仙台支部



教育学研究科・教育学部の 部局ビジョン

教育学研究科長・教育学部長 本郷 一夫

2014年5月、東北大学グローバルビジョン（里見ビジョン）が公表されました。そこには、「教育」「研究」「震災復興」などに関する7つのビジョンが示されています。それに対応して、教育学研究科・教育学部においても、部局ビジョンを公表しました。また、2017年度までの機能強化に向けた取り組み方針とともに、以下の3つの重点戦略・展開施策を明示しました。

第1に、「グローバルリーダー育成のための教育改革」です。これについては、今年から「アジア教育リーダーコース」（AELコース）を開設しました。このコースは、東アジアの各大学を大学院生が移動しながら学ぶことによって、東アジアの文化に精通した教育リーダーを育成しようとするものです。今年の夏は、東北大学においてコースが開催され、東アジアの国から計18名の学生が参加しました。今後は、国立政治大学（台湾、2015年冬）－南京師範大学（中国、2015年夏）－高麗大学（韓国、2016年冬）と学生が移動しながら学ぶ予定です。

第2に、「世界を牽引する最高水準の研究への挑戦」です。これについては、研究科長裁量経費により教育学研究科の教員が中心となって、国際共同研究を進める計画を立てています。また、今年の秋には英文のジャーナルを発刊することによって、国際的情報発信力を強化する予定です。

第3の「東北大学復興アクションによる支援及び新プロジェクトの開拓」については、2015年3月に仙台で開催される第3回国連防災世界会議において、「震災子ども支援室」における震災遺児・孤児及び里親などに対する支援や東北大学復興アクション100⁺に基づく「教育という視点からの復興支援」の取り組みについて報告する予定です。

大学の研究と教育を巡る環境が大きく変わりつつある現在において、教育学研究科・教育学部のこのような取り組みに対して、今後とも同窓会のご協力をご支援をよろしく申し上げます。

（2014年8月4日）

平成26年度 総会のご案内

平成26年度の東北大学教育学部同窓会仙台支部の総会を下記のとおり行います。皆様お誘い合わせの上、ご参加ください。

記

1. 日 時 平成26年11月3日（月）午後1時
2. 会 場 ホテルJALシティ仙台 2階
3. 内 容 ①総会
②講演会 講師 阿部和夫氏
「東日本大震災を記録するドキュメンタリー映画を製作」
③懇親会（会費5,000円）

35回目の総会を迎えるにあたり

—— 万事入精の精神を以て ——

支部長 渡邊 宣隆 (39年入学)

本年で35回目の定期総会を迎えるにあたり、区切りとして「記念号を」という提案があったことを踏まえ、会報のページ数を4頁増やすことといたしました。そこで、冒頭に今までの会報に載っている随想等から設立の経緯を整理してみました。

支部設立は昭和54年、教育学部創立30周年記念式典において、仙台市長来賓祝辞を出席していた仙台市教育長の藤井黎氏（同年1月1日に発令）が急遽代理で述べられた事が縁で、当時の学部長塚本哲人氏が後日同窓会仙台支部設立の話を持ち込まれたことに端を発しています。話を受けた藤井氏は第一回生で市内の小学校長三浦氏に設立の話をかけ、その後塚本氏が直接勤務校に足を運ばれ依頼、全国の支部づくりのスタートとして仙台支部結成が動き出したということです。三浦氏は早速同期生の岩渕、小野、志村、富塚、丸谷、川井各氏に呼びかけ準備委員会を立ち上げ準備に取り掛かったのが55年7月末だといえます。まず名簿作成、規約作成、会長・役員選出、設立総会会場選定、経費の捻出等々山ほどある仕事を土日返上で精力的にこなしています。特に名簿作りにご苦労されたと後日述懐しています。また、会則の作成に当たっては単なる懇親会に止めるのではなく一つの研修の場としての性格を根幹に置き、まずは会費を徴収せず組織固めから始めたということです。そのため学部の先生方に薄謝で講演をお願いしております。これは現在も引き継がれております。昭和55年11月、150名を超える会員の参加で総会が開催され初代支部長に藤井氏が選出されます。準備経費は準備委員の自腹で賄われたといえます。

設立・発展に奔走した先輩諸氏のご尽力の上に現在の支部活動があることに改めて思い至りました。

あらゆることに誠心誠意を尽くし丹精を込めて

いく姿はまさに成功の秘訣である万事入精の姿勢に他ならないと頭の下がる思いです。万事入精の姿勢こそ、支部運営の在り方であると思わされました。

それでは第35回総会へ多くの方々が参加されますことを祈念し昨年の総会を振り返ってみます。昨秋の総会は、ホテルJALシティ仙台を会場に、本部長代理上埜高志副研究科長、関東地区同窓会星永揚会長を来賓に迎え総勢49名でした。前東北大学大学院教育学研究科教授水原克敏早稲田大学教授の講演「教育改革の今日的課題」は、どういう社会人の



(星永揚関東地区会長)

育成が求められているかということから教育課題・教育改革を分析し、提言をされる等々感銘深く拝聴、学究的雰囲気に入ることができました（詳しくは別項で）。懇親会の始まる前、急遽、横浜で音楽活動をしている同窓生の星重昭氏（39年入学）の率いる星の子楽団が駆けつけ支部懇親会のため数曲演奏を披露してくれました。そして星の子楽団の伴奏で「青葉燃ゆる」を合唱した後、懇親会が開始されました。星永揚関東地区会長さんから祝辞を頂いた後歓談、大いに盛り上がり最後に富塚英郎参与の万歳三唱で会員諸氏の絆を強めて閉会しました。



(星 重昭氏)



(会場風景)



(富塚英郎参与)

教育学部の移り変わり

学部同窓会監事(教育学研究科教授) 笹田 博通 (48年入学)

私に与えられたテーマは、教員養成課程廃止(昭和40年)から現在までの「教育学部の移り変わり」ということですが、その具体的経緯を千五百字程度で示すことは到底不可能です。そこで、自身も執筆ないし編集に携わった『東北大学教育学部50年のあゆみ』(1999年)や『東北大学大学院教育学研究科・教育学部の歩み 1999~2012』(2014年)をもとに、私が教員となってから起こった、二つのエポック・メイキングな出来事を記すに止めさせて戴きたく存じます。

私は昭和57年に東北大学教育学部教育哲学講座助手、昭和63年に同講座講師、平成2年に同講座助教授に就任致しました。助教授となってから三年後(平成5年)、東北大学教養部が廃止されましたが、平成10年、教育学部におけるきわめて大規模な改革がありました。いわゆる「大講座制」の実施です。これに伴い、従来の2学科(教育学科、教育心理学科)15講座(教育哲学、教育史、教育思潮、教育社会学、社会教育学、スポーツ科学、教育行政学、学校管理、教育内容、人格・学習心理学、児童・青年心理学、臨床心理学、聴覚言語障害学、視覚障害学、知能障害学)が1大学科(教育科学科)5大講座(人間形成論、教育政策科学、成人継続教育論、教授学習科学、人間発達臨床科学)に改組・再編されました。

大講座制の特色の一つは、これによって従来の5専攻(哲学、社会、行政、心理、障害)の枠を超えた分野構成が可能となったことにあります。たとえば、旧社会専攻の一部と旧行政専攻の一部を合体させて教育政策科学講座を創り、また、旧行政専攻の一部と旧心理専攻の一部を併合して教授学習科学講座を設けるなど、さまざまな試みが意欲的に行われた次第です。

こうした大講座化の背景を成していたのは「大学院重点化」の動向であり、平成12年、教育学部

は1学科(教育科学科)2大学科目(教育システム論、教育臨床論)1附属施設(大学教育開放センター)より構成され、また、大学院教育学研究科は1専攻(総合教育科学)5基幹講座(前掲)1協力講座(大学教育開放論)より構成されることになりました。授業科目もまた、演習を含め、すべて学部生用と大学院生用とに峻別されました。私の学生時代は、博士課程院生から学部3年生まで、時には助手も同じ演習に出席し、緊張感のうちに充実した議論が展開されていたものです。

(私の指導教官でもあった故・千葉泰爾先生などは、演習のあとも巷に繰り出し、酒盃を傾けつつ学生たちと深夜まで語り合っておられました。)大学院重点化後には、そうした授業を行うことがきわめて困難になりました。

東北大学法人化(平成16年)後の主な出来事としては「教育ネットワークセンター」の開設(平成18年)、「教育設計評価専攻」の新設(平成20年)、学部「2コース制」(教育学、教育心理学)への改編(平成21年)、「アジア共同学位開発プロジェクト」の発足(平成23年)などが挙げられます。そして、「3・11東日本大震災」以降、教育学部は、被災者・被災地への支援に関する種々の取り組みを行っています。

因みに、古代ギリシアの「アクメー」なる言葉は、或る人物の生存年代ではなく、その人の生涯における全盛期を指すそうですが、このたび、教育学部のアクメーはいつ頃であったかと自問し、私なりの答えを得ることができました。それは、しかし、数年後に定年退職を迎えることになる私の、教育学部教員としてのアクメー(?)にすぎません。教育学部の真のアクメーについて語りうるのは、教育学部がその終焉を迎えた時であり、我々が教育学部は今後とも存続——否、発展しなければならないと存じます。

教育学部同窓会事務局だより

学部同窓会事務局長(教育学研究科准教授) 神谷 哲司 (H2年入学)

同窓会の事業と致しまして、平成25年度は、例年通り、(1)卒業・修了学生の祝賀会援助事業、(2)現役学生への海外学会発表渡航費援助事業、(3)仙台支部寄附金による博士論文執筆援助事業を実施いたしました。平成26年度の事業計画も基本的には同様ですが、さらに同窓会名簿の整理に向け、現在、同窓会のウェブページに名簿登録のページを設置できるよう働きかけております。また、教育学部同窓会といたしまして、より身近な情報を発信していこうと、平成26年4月facebookに、教育学部同窓会ファンページを作成し、関連情報や川内キャンパスの四季の風景をお届けしております(URLは、<https://ja-jp.facebook.com/almni.sed.tohoku>です)。facebookをやられていない方でもご覧になりますので、ぜひともアクセスください。

また今年度の新たな変革点として、同窓会のさまざまな事業をより迅速に実行していくため、これまで年1回であった同窓会役員会に加え、インターネット・メールでの審議も可能とすることが提案され、了承されたことが挙げられます。これにより、急激に変化していく社会にも対応した同窓会事業が展開できるようになるのではないかと考えられます。現時点で、メールの登録を済ませられていない役員の方におかれましては、早急にメールアドレスをsed-alumni@sed.tohoku.ac.jpまでお知らせいただけますと幸いです。

このように事務体制や情報発信体制を少しずつ整えながら、今後も状況に応じてしなやかな同窓会活動ができればと考えておりますがまだまだ課題は山積みであることは確かです。たとえば、近年の経済的な不況や同窓生意識の希薄さといった理由からかどうかはわかりませんが、同窓会会費の納入率があまり芳しくありません。現在、同窓会費は本学の入学が決まった際、入学する前の3月に振り込んでいただくことになっているのです

が、なかなか新入生とそのご家族には同窓会組織の姿が見えていないようです。この点を、目下喫緊の課題とし、次年度入学生の会費納入の納入率アップを図りたいと存じます。会員のみなさまからも、なにか妙案がございましたら、先ほどお示しいたしましたfacebookやメールアドレス宛にご意見をお寄せいただけますと幸いです。

また、日常的な事務局業務として本学同窓生に対する照会への対応がございまして。近年では特に、リタイアされた世代のみなさまより、青春時代を懐かしむ思いからか、「何年卒の〇〇さんの消息を知りたい」とか、「何年ごろに教育社会に在籍していたはずの△〇さんの住所を知りたい」といった問い合わせが結構ございまして。事務局といたしましては、お問い合わせいただきました方の連絡先を控え、探している方へ直接事務局より、「問い合わせが来ている旨お伝えし、連絡先をお教えする」という手順を踏んでおります。この点、よろしくご理解いただけますと幸いです。

また、いま改めまして、名簿の登録住所の変更などございましたら、ウェブでの登録も少々手間取る可能性もありますので、こちらも、事務局のメールアドレスまで直接お知らせいただけますと幸いです。

事務局の体制自体は大変か細いものであり、迅速な改革は難しいところもございまして、今後とも会員のみなさまのご助力・ご協力の下、現役学生の学生生活がより良きものになるよう、また、卒業生のみなさまにも母校を懐かしんでいただけるよう、事業を展開していければと考えております。なにとぞ、よろしく願い申し上げます。



「教育改革の今日的課題」

(講師・水原克敏氏の紹介・講話の要約)

副支部長 軍司 啓 (39年入学)

講師、水原克敏先生は、1977年東北大学大学院教育学部研究科を終えられ、日本学術振興会奨励研究員を経て、東北大学教育学部助手(1978)、教育内容講座講師(1983)、助教授(1985)、教授(1994)となり、現職は、早稲田大学教育・総合科学学術院 特任教授(教育学研究科「教育課程論」)としてご活躍中です。

社会的には、日本教育学会、日本教師教育学会、日本教育方法学会等、日本カリキュラム学会の代表理事を歴任し、かつ、宮城県及び仙台市のさらに文部科学省の各種委員となり、多岐にわたりご活躍なさっています。

また、東北大学・学校ボランティアを組織し社会貢献の面でもご活躍です。

研究テーマは、よい教師はどのように養成されるにか、また、学校のカリキュラムはいかにあるべきかである。

著書として、『学習指導要領は国民形成の設計書』(2010 東北大学出版会)、『近代日本教員養成史』(1990 風間書房)、『近代日本カリキュラム政策史研究』(1997 風間書房)、『現代日本の教育課程改革』(1992 風間書房)、『新しい時代の教育課程』(2009 有斐閣)がある。

大学の授業では「自分」という授業で総長教育賞授業記録として『自分—私がわたしを創る—』(2004 東北大学出版会)、『自分—わたしを拓く—』(2003 東北大学出版会)、『自分—わたしから私たちへ—』(2004 東北大学出版会)『学校を考えるっておもしろい!!』(2006 東北大学出版会)等の取り組みをなされた。

こうした、学校・教師・カリキュラム・組織・行政等研究や実践を通して教育改革の今日的課題を掘り下げ、私たちの視点をひろげていただいた講演でした。時間が少なくもう少し詳しく聞きたかったとの思いがつのりました。

水原克敏先生の講演

「教育改革の今日的課題」を聴いて

副支部長 吉川 邦彦 (50年入学)

秀逸であったというのが感想の全てである。

水原先生は、本学教育内容講座から教育設計評価専攻に移られ、現在は早稲田大学特任教授である。大学生の自己確立のための授業『自分』や、文科省の教育課程開発にも貢献した著書『学習指導要領は国民形成の設計書』などで有名な教育学者である。先生の問題意識は、知識基盤社会・少子高齢化社会・情報化社会・グローバル社会の中で生き抜く国民、答えを特定できない地球規模の課題に取り組んで前向きに答えようとする国民、さらに新たな地球社会の構造や課題を考えつつ学び続ける国民、そのような国民をどう育てるべきかというものであった。

講演によれば、現政府は教育改革を早急に進めており、地球規模の課題をも乗り越えようとして日本の学習指導要領が新たに作成され、国民形成の設計書として次の10年間の教育を見据えているという。ここから先生は、多文化や多価値観に基づく国際化・地球社会化を踏まえた上で、我が国の入試改革や道德教育・小学校の英語必修化から日々の教育実践の重要さまで言及され、その視点は深く鋭く、日本の教育現場の広範な問題を見抜いたものだったように思う。特に私は、中学校の校長の後で県立高校の校長を勤めさせていただいているため、先生のご指摘は本当に耳の痛いところであった。

日本が小さな政府論に舵を切ったため、「新たな公共性」と「成熟した論議」により、学びの質の問い直しや異質な人々との交流を目指すシティズンシップ教育をどうすべきかが喫緊の課題であるという、水原先生の最後の言葉は本当に忘れられないものとなった。

平成25年度 仙台支部事業報告

<p>第1回支部役員会 25年5月4日(日) 会場 アエル6階 9時30分から11時30分</p> <p>顧問会 25年6月中旬 第2回支部役員会 25年8月24日(日) 会場 教育学部研究棟</p> <p>第34回仙台支部総会 25年11月17日(日) 会場ホテルJALシティ仙台 第3回支部役員会 26年1月5日(日) 会場ホテルJALシティ仙台</p>	<p>報告事項 平成24年度仙台支部事業報告・会計決算報告について</p> <p>協議事項 ①平成24年度仙台支部事業報告並びに会計決算報告の承認について ②平成25年度仙台支部事業計画案並びに会計予算案について ③平成25年度仙台支部第33回総会・講演会・懇親会原案等について ④「会報第17号」発行構想原案について ⑤役員・年度理事改選並びに後補充について</p> <p>協議事項 平成25年度第33回支部総会講師推薦・役員改選並びに年度理事補充等について ※開催できなかった</p> <p>協議事項 平成25年度仙台支部34回総会運営について ①平成25年度記念講演講師報告 ②平成25年度第34回総会・講演会・懇親会の役割分担について ③平成25年度仙台支部第3回役員会日程等について その他「会報第17号発行」 総会案内状発送事務協力依頼</p> <p>総 演 会 講 演 会 懇 親 会 内 容</p> <p>講師 早稲田大学教育・総合科学学術院都特任教授 水原克敏様(教育課程論) 39年度入学星君のバンド演奏特別出演</p> <p>①第34回支部総会の反省及び会計報告 ②平成25年度事業及び会計中間報告 ③平成26年度総会日程等協議</p>
--	---

平成26年3月31日

平成25年度 東北大学教育学部同窓会仙台支部 会計決算報告

I 一般会計

1. 収入の部

(△ 予算額との比較減 単位:円)

	本年度予算額	本年度決算額	比 較	備 考
会 費	370,000	372,320	2,320	延べ367人
繰 越 金	515,961	515,961	0	
雑 収 入	539	30,529	29,990	利子等
合 計	886,500	918,810	32,310	

2. 支出の部

(△ 予算額との比較減 単位:円)

	本年度予算額	本年度決算額	比 較	備 考
事 務 局 費	126,000	111,176	△ 14,824	
印 刷 費	80,000	62,388	△ 17,612	封筒、葉書等印刷
消 耗 品 費	15,000	22,548	7,548	用紙、インク等
備 品 費	3,000	0	△ 3,000	文具類
事 務 手 当	25,000	25,000	0	5,000×5人
雑 費	3,000	1,240	△ 1,760	送金料、印字代
会費振込手数料	35,000	31,360	△ 3,640	会費振込手数料
会 議 費	50,000	19,418	△ 30,582	役員会他
通 信 連 絡 費	150,000	68,363	△ 81,637	総会案内等
会 報 費	60,000	53,050	△ 6,950	
印 刷 費	50,000	43,050	△ 6,950	会報印刷代
会 議 費	10,000	10,000	0	会報発行委員会会議
総 会 費	65,000	40,000	△ 25,000	
会 場 費	20,000	0	△ 20,000	会場使用料
表 示 関 係 費	10,000	10,000	0	演題、看板等
装 飾 費	5,000	0	△ 5,000	
講 演 会 費	30,000	30,000	0	講師謝礼、車代
慶 弔 費	10,000	0	△ 10,000	弔電
雑 費	10,000	0	△ 10,000	
予 備 費	280,500	24,358	△ 256,142	旅費、手土産等
運 用 基 金	100,000	100,000	0	
合 計	886,500	447,725	△ 438,775	

※収入総額918,810円－支出総額447,725円＝残高471,085円は(次年度へ繰り越します)

II. 運用基金

収入700,000円＋収入100,000円－支出0円＝差引残高800,000円(次年度へ繰り越します)

会 計 監 査

平成25年度東北大学教育学部同窓会仙台支部の会計決算にあたり、通帳・会計
出納簿・領収証を点検したところ、整備が完全でありますことを報告いたします。
平成26年3月31日

監 事 笹田 博 通
監 事 荒木 聰 恵

平成26年度 仙台支部事業計画

顧問会
26年4月18日(金)
会場 教育学部研究棟

- 平成26年度第35回総会時の講師の依頼について
- 仙台支部の今後について
- 会員増等について
- その他

第1回支部役員会
26年5月6日(日)
会場
東北大学文系総合研究棟
10時00分～12時00分

- 報告事項 平成25年度仙台支部事業報告・会計決算報告について
協議事項 ①平成25年度仙台支部事業報告並びに会計決算報告の承認について
②平成26年度仙台支部事業計画案並びに会計予算案について
③平成26年度仙台支部第35回総会・講演会・懇親会原案等について
④「会報第18号」発行構想原案について
⑤役員・年度理事改選並びに後補充について
⑥その他

第2回支部役員会
26年8月24日(土)
会場
東北大学文系総合研究棟
10時00分～12時00分

- 協議事項 平成26年度仙台支部仙台支部35回総会運営について
①平成26年度記念講演講師・演題の確認
②平成26年度第35回総会・講演会・懇親会の役割分担について
③平成26年度仙台支部第3回役員会日程等について
その他「会報第18号発行」 総会案内状発送事務協力依頼

第35回仙台支部総会
26年11月3日(日)
会場ホテルJALシティ仙台
第3回支部役員会
27年1月11日(日)
会場ホテルJALシティ仙台
17時00分

- 総演会
講 演 懇 親 会 会 容
講師 阿部和夫先生(昭和32年度入学)「東日本大震災をドキュメンタリー映画の製作」
①第35回支部総会の反省及び会計報告
②平成26年度事業及び会計中間報告
③平成27年度総会日程等協議

平成26年4月1日

平成26年度 東北大学教育学部同窓会仙台支部 会計予算

I 一般会計

1. 収入の部

(△ 前年度比較減 単位:円)

	前年度予算額	本年度予算額	比較	備考
会費	370,000	350,000	△	20,000
繰越金	515,961	471,085	△	44,876
雑収入	539	215	△	324
合計	886,500	821,300	△	65,200

2. 支出の部

(△ 前年度比較減 単位:円)

事務局費	前年度予算額	本年度予算額	比較	備考
印刷費	126,000	126,000	0	
消耗品費	80,000	80,000	0	
備品費	15,000	15,000	0	
事務手当	3,000	3,000	0	
雑費	25,000	25,000	0	
会費振込手数料	3,000	3,000	0	
会議費	35,000	33,000	△	2,000
通信連絡費	50,000	50,000	0	
会報費	150,000	130,000	△	20,000
印刷費	60,000	85,000		25,000
会議費	50,000	75,000		25,000
総会費	10,000	10,000	0	
会場費	65,000	60,000	△	5,000
表示関係費	20,000	20,000	0	
装飾費	10,000	5,000	△	5,000
講演会費	5,000	5,000	0	
慶弔費	30,000	30,000	0	
雑費	10,000	10,000	0	
予備費	10,000	10,000	0	
運用基金	280,500	217,300	△	63,200
合計	100,000	100,000		
合計	886,500	821,300	△	65,200

II 運用基金

1. 収入の部

	前年度予算額	本年度予算額	比較	備考
繰越金	700,000	800,000		100,000
一般会計より	100,000	100,000		0
雑収入	0	0		0
合計	800,000	900,000		100,000

2. 支出の部

現在支出の予定はない。支出は現時点では0円。

※ 一般会計からの額は、その年の決算残額によって変わる。

和服の美学

佐藤 弘 (24年入学)

その日、片平の階段教室はしゃんとした閑静の時空に占有されていた。午後3時近くだったろうか、羽織・袴という瀟洒な和服姿で教授が現れた。草履の滑らかな歩みで教壇に登り、穏やかな語り口で講義が始まった。初めてお目にかかれた憧れの岡崎義恵教授の気品高い風貌であった。ふと、歌舞伎の名優でもお出ましかと思わせられた驚懼の一瞬であった。

昭和26年4月、2年間の教養課程を終え、やっと片平の講義棟での学部生活が始まったのである。教育学部国語専攻生は、文学部の国語・国文科の学生諸君と一緒に受講するシステムに組まれていた。学部自体に講義棟はなく、国語専攻の教授陣も不在であり、旧来(帝大)の国語・国文学の講義に参加させてもらう「お客さん」の存在だったのである。それでも大学側の配慮のおかげで、肩身は狭かったものの、特に卑屈な思いを抱くこともなく、大きな顔で受講する「お邪魔虫」を続けることができる感謝もしていた。

当時、国立大学国文学系の中で、「日本文芸学」という独自の学問の樹立を提唱し、学界の第一人者として名声を博していた教授は、私にとっては雲上の存在であり、魅力あるその講義に接する夢の実現は何にも代えがたい至福の喜びであった。

国文学研究に美学の視点で論及した「日本文芸学」や「美の伝統」等の名著を求めるべく、アルバイトを終えた夏休みに上京し、神田の古書店でそれを購入できた時は感激もひとしお。その後、教授の研究理念の真髄を追究するための難解な読解作業を長い期間続けたことを思い出す。

四季折々、和服姿で凛として通された格調高い講義は、正に教授自身の美学の具現でもあったと思われる。爾来63年、多大のご教示を賜った文学博士岡崎教授(日本学士院会員・1982年没)に、今ひたすら崇敬の念を捧げるばかりである。

在学時代の綱渡りの思い出

平野 和夫 (25年入学)

当初、経済学部を受験したが敢えなく失敗し、一浪を覚悟したところへ、第二志望教育学部合格の通知が届いた。授業料半期で1800円、実技試験のない音楽専攻に一応籍を置いてみることにした。専攻第二志望の学生を加えて約15名で授業が始まったが、ピアノの全く初心者を含めて5名で、文字通り零からの出発であった。頭の中は常に来年の受験が占めていたが、いざレッスンを始めると、何故かピアノの魅力にとりつかれ、いつしか再受験を忘れてピアノ漬けの生活に変わっていった。

今考えてみても誠に不思議と言わざるを得ない。二年目に早くも教育実習があり、付属中・東華中・三女高で教壇に立つという、私としては今でも冷汗が出るような途方もない経験をしたのである。

その頃、色々なコンサートに出演して独唱したり、東北大学全学部の合同演奏会で教育学部の合唱指揮をする等、次第に音楽に深くのめり込んでいった。

昭和27年に、当時の文部省が全国の小・中・高校の音楽教育のレベルを上げるべく、先ずは指導者となる教師を養成するため、全国の国立大学音楽科の学生各2名を推薦させ、器楽・声楽をテストの上原則1名を東京芸術大学に入学させる制度を設けた。幸運にもそれに選ばれ、後期の二年間は芸大で学ぶことができた。強い使命感を持って厳しい勉強をした思い出は尽きないが割愛。

高校時代の受験勉強、大学入学後と芸大時代の学習と、思えば自分で口にするのもおこがましいが、大袈裟に言えば血の滲むような毎日であった。歳をとるとよく昔の自慢話をするが、私の唯一の自慢は無欠席を通したことか。

諸先生、同期生に心から感謝し拙文を終る。

在学時代の思い出

佐藤 成之 (26年入学)

原稿依頼を受け、60年以上前の過去を思い出しました。老化で記憶も曖昧模糊として、断片的に頭に浮かんだ事を書きました。

昭和26年入学、戦後復興不十分で、食糧難、交通難等で何もかも不自由であり、民主主義がやや理解され始め、若干先の見通しが出て来た頃です。学生は服装は軍服あり、古い学生服あり、でも角帽だけは誇らしげに全員被って闊歩していました。家族ぐるみ貧しく、学食利用の金もなくコッペパンで昼食、アルバイトも夏休み以外は見つからず、中にはバンドマンや米軍基地の守衛になったり、鞆の中に闇米を忍ばせる運び屋だったりでした。下駄、足駄は構内禁止で裡足で歩いた。

授業は一般に楽しく、友人関係も新鮮で充実していた。突然学級委員に任命され4年続けた。

しかし英語、独語は苦しめられた。特に独語は2年後半にゲーテの「世界史とは何ぞや」が教本になり、悪戦苦闘した。単位修得は案外困難で一割程度が原級留置きとなった。

3年になり、片平丁(旧工専校舎)に移り、単位は何の学部で習得しても通用した。有名教授の授業は貫録と内容に圧倒され魅せられた。日本経済史、刑法史、文芸学、教育心理等々東北大学の素晴らしさを実感させられた。これで一念発起して勉学に精励すれば、人生も変わったと思うが、囲碁麻雀、そして怠惰な生活に慣れ親しみ、卒業単位だけ獲得すれば良いと思った。当時法律は朝令暮改で、校長免許状制度が突然廃止され、多くの単位が不要となり、閑人不善をなす、益々拍車がかかった。4人で自炊していたが、近隣からドテラ学生の愛称を賜った。当時は大学卒教師不足で就職は引く手数多であった。無事就職したが、これからが大変で各自努力せざるを得なかった。人生楽あれば苦あり、一筋縄ではいかないものだ。

君がいてくれたから

青木 敏浩 (27年入学)

中村雅俊の学生時代を歌った“ふれあい”を聴きながら60余年前のその頃にタイムスリップしてみることにした。昭和27年はメーデー事件などもあり、学生運動も盛り上がっていた。

入学して北七校舎に通学して間もなく大学協同組合の委員募集の貼り紙を見て、アルバイトの感覚で応募した。協組(大学生協に法人化は5年後)には従業員は一人居たが、委員とはいうものの学用品やパンなどの販売の仕事を手伝う羽目になった。昼食時にパンが不足すると仕入先の原田パン屋(今は別業)へ駆けつけてパンを運んでくるなどの有様である。合間を縫って講義に参加し、どうか学生としての面目を保つことができたようだ。その後、北海道出身の坂本君や茨城出身の脇田君の応援を得て学業との両立が可能となった。

教育実習は附属小学校で行い、先頃亡くなられた富田博先生が指導教官で指導案の書き方や発問の仕方など細やかにご指導頂き、事後の教員生活に役立ったことも今は懐かしい。

学部(片平丁)に移ってからは本部協組の学生理事となり、仕入担当で購買部の運営に携わった。売れ筋は、かばんとYシャツで東京まで出張して問屋や東大生協と共同購入をしたり、角帽は郡山から仕入れて安く売ったりと大忙しだった。試験間近にはプリント部で作成した講義録(真面目な学生のノートを借りて印刷し販売)が大いに役立った。その当時他学部の先生の講義を聞いたことは我々の最大の収穫であった。たまたま岡崎義恵先生の名講義をお聞きして、その内容が試験に出題された時は何か得したような気がした。友人と飲みながらの人生論も良き思い出である。

雅俊の歌は「僕が僕でいられた」と続く。“君がいてくれたから”の歌の一節である。学生時代から現在までに出会った多くの人々に、「貴方のお蔭です」と感謝の気持ちを述べたいと思う。

在学時代の思い出

桂島 新一 (28年入学)

昭和28年教育学部は宮城師範が東北大に包括された時代で激動の渦中にありました。新制大学の理想として特筆されたのは「委託生制度」(全国初 東北大だけ)でした。例えば伊藤雄三君の場合は「1年2年は教育学部理専 3年4年は理学部生物学科に在籍し、ともに私の大学の故郷である」となったのです。

その頃 長谷川松治先生の講義を受けた斎藤克己君はその喜びを次のように書いています。「・・・私の読書を駆りたてたものに 教科書(『原子力時代に生きて』B・ラッセル)がある。その後 ラッセルの哲学、社会論、人生論、自伝と読み進み何日か夜を徹したのは愉快的思い出です。」

一方 師範の火は児童文化班 山梨五郎君たちに受け継がれていました。その様子を紹介しましょう。「・・・山間、僻地の児童に少しでも文化の匂いを伝えたいと 紙芝居や手遊びに汗を流しました。鬼首の山を越えてきた子供たちの輝きのある目は40年経った今も忘れることはできません」

メモ ～昭和28年ころのあれこれ～

- 苦学生が多かったので、寮の食費は一日、朝晩2食で100円以下でした。昼食も学食で10円のコッペパンか15円のかけそばでした。暖房はなく、押し入れで頭から毛布をかぶり、裸電球で照明と暖をとりました。
- 廊下の両側に並ぶピアノ室はいつも満杯、流れる「乙女の祈り」と体育室からの「重量挙げの轟音」が交錯していました。
- 教育学部の会誌は「わだち4号」には橋浦先生の「誤解について」とか地理研究班の「大須部落の背負子の研究」などがでていました。

古き良き時代

伊藤 公二 (29年入学)

私の在学時代といっても半世紀以上も前ですし、思い出は遠く忘却の彼方…というのが実感です。

60歳で公立高校を退職し、縁あって私学に12年間の勤務、合わせて50年の教職という至福の教師人生でした。

公立校を退職して間もなく、友人の誰からともなく再会の話が出て、早春の午後親友五人が秋保の宿に集いました。話題の中心は矢張り在学時代の思い出です。

一時期下宿を共にした友人N君は大学の入学式で隣り合わせ、所属クラスも同じ人文科という奇遇でした。彼は英専、私は国専です。

当夜は夜を徹しての語らいとなり、締めは「青葉燃ゆる」の大合唱で盛り上がりました。

四年間の学生生活は五人とも生家を離れて自由そのものの毎日です。個性的な教授陣による一般教養、語学中心の講義は新鮮そのもの、試験に備えてノート執りに必死の毎日でした。昼休みは車座で芝生にすわっての歌唱指導があり、「歌ごえ運動」はブームだったようです。講義終了ともなれば、連れ立って下宿へ一直線か一番町の番ブカが相場です。飽きもせずタバリングの連続。

一杯60円也のコーヒーで聴くクラシック名曲の数かず、映画は東北劇場で観る洋画が専門、若者たちの友情も恋愛も総て音楽や映画の中で昇華されて行ったのでした。

コンパやハイキングは女子学生が一緒というだけで楽しかったようです。広瀬川べりや八木山・野草園方面の逍遥徘徊もよくやりました。

友人の下宿では歓待され、宿泊した次の日は朝食を出してくれました。現在と違い、仙台市民から学生は常に愛され、尊敬を受けるというような存在だったようです。

勉学によって知識を身につけ、教授陣、学友と交わりを深める事が人間性の陶冶になりました。

児童文化班に入部して 良かった・・

千葉 俊男 (30年入学)

手元に「児童文化班機関紙」1955. 6. 1付の格調高い発刊の会報がある。その年の4月、僕は工業高校から教育学部2年課程に入学していた。

文章が語り言葉で読み易かったので繰り返し読んで感銘していた。大学生活を実感もしていた。

そのサークルに入部できたのは、故阿部輝男君に誘われたからだ。北七校舎のグラウンドで弁当を食べながら、故渡辺(犬飼)良一君と一緒に入部した。その場には大宮徳男君や小原弘三君も居た。

毎週土曜日には、県立図書館で「土曜子ども会」が開かれていた。積極的に参加しては、紙芝居や実演童話に挑戦していた。町内会の子供会に出掛けることも楽しみの一つであった。

忘れられない思い出は、巡回子供会に参加したことだ。「すみっこNo.10」によれば巡回方面は4方面で、僕は牡鹿郡女川方面(尾浦小・女川5小・寄磯小・新山分校・山下小)に参加した。

メンバーは渥美(3年)・小畑博(2年)・内海(2年)・櫻井(2年)・遠藤(2年)・伊藤(2年)・千葉(2年)・松本(2年)・岡田(1年)・紺野(1年)である。

合宿しながらの巡回で、自炊の夕食作りも楽しかった。調理の上手な内海さんの手腕に感心したりした。学校訪問の途中海を眺めたり、山道を何キロも歩くのも楽しかった。男子高校出身で女性陣と一緒に食事したり、リクレーションを楽しんだりすることは皆無だったから夢のような(夢でも想像できなかった)一週間であった。

昭和32年4月、仙台市立坪沼小に初赴任した。

山あいの小さな学校だった。そこに思いがけず児童文化班のメンバーが学校訪問してくれた。

うれしかった。その仲間は、現在でも酒仙会の名称で活動が継続している。60号記念誌も近い。

意義深い学びと交流

今野 健 (31年入学)

「学ぶ」と交流することの上で、4年の在学期間は凝縮されたものであり、生活に充足感があった。前期の2年間は北七校舎だった。かつての宮城師範の学舎だけあって古色蒼然、校舎前面を大樹が覆っていた。兄が「宮師二三会」のメンバーでここに学んだことでもあり親しみを感じた。

図書館の蔵書は、近年発刊のものより宮師時代のものが多くを占めていた。それなりに貴重である。講義の合間に利用を心掛けた。道場も懐かしい。柔道部員の仲間と時には体専の授業に加わり県柔道連盟の講師先生の指導を受けて励んだ。秋の学部内運動家のサークルリレーでは、柔道部員は皆、柔道着を着込み、場内に敷いた畳上で投技を披露しての継走である。大きな負荷を背負いながらの2等賞で大喝采を受けたものである。

学部での2年間は、片平キャンパスを主とした勉学であった。卒業後の学校勤務のことを考え、学校教育専攻、国語ピークとして、小・中・高1級教員免許の取得を目指して講義選択を工夫。学部進学の際、川内一帯が米軍駐留から解放されて東北大学のキャンパスとして生まれ変わった。文学部学生との合同受講で、払い下げられたばかりの米軍宿舎内での授業、人間の生き方まで及ぶ吉田賢抗先生の中国文学講義は殊更に印象深い。先生の編纂された『新釈漢和』は、今も愛用している。また、文学部長谷川先生の言語学の講義も学ぶことの面白さを味わった。試験では、東南アジアの国の短文の和訳が出題されたが、解釈補助を与えられて算数を解く如くであった。先生は、『奇跡の人・ヘレンケラー』の訳者で、31年度英語の入試に原本の1節を出題されたのであった。

入学時に柔道部の他に児童愛護連盟と視聴覚教育研究班に入部した。海・山の僻地校巡回や施設訪問に明け暮れた。北七校舎時代の同級生や後者の仲間ととの交流や集いは喜寿の今も続いている。

仙台支部役員名簿

(平成25. 11. 17～平成27総会時)

顧問	25 高橋 公正	26 佐々木一洋
	28 永野 昌一	31 雪江 美久
	36 岡崎 忠	36 阿部 琢也
	37 関口 隆	大学 本郷 一夫
支部長	39 渡邊 宣隆	
副支部長	39 軍司 啓	50 吉川 邦彦
参与	24 岩淵昌次郎	24 富塚 英雄
"	29 石森 幸子	31 枡澤 怜
"	32 佐々木亀三郎	33 佐藤 健仁
"	35 伊藤 昭	39 大浪 榮一
"	元学級 菅井 邦明	元学級 菊池 武剋
"	元学級 荒井 克弘	元学級 細川 徹
"	元学級 宮腰 英一	
理事	24 佐藤 弘	
"	25 高橋 公正	25 静田 一
"	26 池田 和夫	
"	27 青木 敏浩	27 阿辺 博亮
"	28 小關 幸生	28 桂島 新一
"	29 市川 宏	29 佐藤庸太郎
"	30 千葉 俊雄	
"	31 今野 健	31 飯澤 道久
"	31 福井 正子	
"	32 煤田 泰蔵	32 村上 重作
"	32 竹澤錬太郎	
"	33 金岡 昭房	33 山形美也子
"	34 工藤 忠久	
"	35 泉 豊	35 岡本 幸子
"	36 小野 淳	
"	37 賀屋 義郎	37 佐々木典雄
"	38 文屋 優	38 文屋 國昭
"	39 朴澤 徳昭	39 太田 將勝
"	40 吉野 信武	
"	41 安住 裕	48 櫻田 博
"	50 別府 成裕	
"	51 日下 毅	51 佐藤 邦宏
"	52 白澤 利広	54 南城 一之
"	57 川上 芳夫	H 4 吉植 庄栄
監事	37 荒木 聰恵	48 笹田 博通
大学理事	H博 八畝 友広	H元 神谷 哲司
事務局長	39 軍司 啓	
事務局補佐	37 関口 隆	

各委員会から

下記のように委員会を構成し、それぞれ活動を展開しております。

会則検討委員会

委員長	31 枡澤 怜
副委員長	31 今野 健
委員	25 静田 一 28 桂島 新一

名簿作成委員会

委員長	33 金岡 昭房
副委員長	35 泉 豊
委員	25 高橋 公正

会報発行委員会

委員長	39 太田 將勝
委員	31 福井 正子
"	38 文屋 優
"	39 軍司 啓

会計委員会

委員長	29 石森 幸子
副委員長	39 朴澤 徳昭
委員	35 岡本 幸子 37 佐藤 勝子

後 記

- ◎会報18号をお届けいたします。ご多用の中、玉稿をお寄せ頂きました皆様に心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。
- ◎総会にご出席の際は、この会報をご持参いただきますよう、お願い申し上げます。(太田)

事務局

〒982-0262 仙台市青葉区西花苑2-7-18
 軍司 啓 TEL 070-5322-3322